

暗く淀んだ海の中――。

腕を伸ばして必死に泳ぐ俺。しかし前にも後ろにも進まない。泳いでいる感覚さえない。ここが何処なのかも分からない。ただただもがき苦しむだけだった。

目の前には何も見えなかった。黒く染まった視界が見えるだけだ。

どれくらいそうしているのか分からない。ほんの一瞬にも思えるし、何年もそうしているようにも思える。こんな苦痛がいつまで続くのだろう。早く元の世界に戻りたいと思った。

目を開けろ！ 目を開けるんだ……。そうすれば世界が変わる。元の世界に戻れるのだ。俺は漠然とそう思っていた。

何も聞こえない……。何も存在しない……。そんな無の世界。俺はなぜこんな所を彷徨^{さまよ}っているのだろう。

目を開けろ！ 目を開けるのだ！ 俺はずっとそう思っていた。呼吸はしている。苦しくはない。

そして、ついに俺は重い瞼を上を持ち上げることができた。両目をしっかりと開けて、見えた世界を確かめる。

ぼんやりと白い視界が見えた。それが何なのかは判らない。しかし俺は確かに目を開けているのだ。同時に手を動かしてみた。指が数ミリ動いた感覚があった。よし、少しずつ戻っている。

視界の方も霞が取り除かれてきた。ピントが合うようにハッキリと見えてくる。白い、確かに白い……。何なのだ？ 白くは見えるが、何が白いのか俺には判らない。

周りに視線を巡らせてみる。ここは部屋なのか？ どこかの部屋だ。いったい俺はどこに居るのだろう。

「いっぺー」

そんな声が聞こえた。聞き覚えのある声だったが、誰の声なのかは思い出せない。でも女の声だ。とても懐かしい声だ。

「お母さん！」

また同じ声が聞こえてきた。そして今度は違う声で「いっぺー」と聞こえた。どこか騒々しい感じがした。二人の女が「いっぺー」と言っている。

「お父さん呼んできて」

そんな声が聞こえた。いったい何なのだ？ 目が覚めたと思ったら、少し離れたところから二人の女が慌ただしく騒いでいるのだ。

状況が理解できずに俺は部屋中を見渡した。白く見えていたのは天井だとわかった。間違いなくどこかの部屋に居るのだ。

少しだけ首が動いた。ガラスが見えた。その向こうに見覚えのある女がいる。声の主はその女だった。「いっぺー、いっぺー」と何度も読んでいる。もしかしたら「いっぺー」というのは俺の名前なのか？

女がガラス越しに俺を見ながら、必死に「いっぺー」と言っている。一体誰なのだ。そんなことを考えていると、俺の脳裏にある光景が浮かんできた。

木々の緑が見える。そしてそれがものすごい勢いで過ぎ去っていくのだ。ゴーという音が聞こえてくる。グレーに染まったアスファルトが見えた。その上にはタイヤのような前輪。

走っている。バイクだろうか、そうだ、バイクだ。俺は山の中を走っているのだ。それを思い出したとき、部屋のドアが開けられた。

白衣を着た中年の男性が入ってきて、俺の横に立ち、俺の顔を覗き込んだ。

「いっぺー、聞こえるか」

静かな声で俺に話しかけてきた。俺が「いっぺー」であることは間違いないようだ。俺は眼球だけを動かして、そっちを見た。心配そうな目で俺を見るのは……。

「おやじ？」

なんとか声に出せた。しかし力のないのが自分でもわかった。

「そうだ、父さんだ。わかるか、いっぺー」

いつになく優しい問いかけだった。俺は周りを見渡した。どうも違和感があると思ったら、口に何かを付けられている。

「ここは」

「病院だ。お前は事故に遭ったんだ。今、母さんと姉さんと呼ぶからな」

親父はそう言ってから、後ろを振り向いて手招きをした。先ほどの二人の女が慌てたようにドアを開けて入ってきた。すぐに俺の横に来て、俺を見た。

「いっぺー、大丈夫？」

「いっぺー」

それは母の美和子と姉の葉子だった。二人とも目に涙を溜めている。それを見て、俺はすべてを思い出した。

そうだ。山道をバイクで走っていた俺は、対向車とぶつかり事故に遭ったのだ。俺の体は宙を飛んで、道路から飛び出して、斜面を転げ落ちたのだ。

だが、そこからの記憶が曖昧だった。どう考えても思い出せない。

「俺……どうなったの？」

今度ははっきりと声が出せたように思う。

「車とぶつかって、すぐに救急車で搬送されたんだ。瀕死の状態でな、三日間眠り続けたんだぞ」

「そんなに……」

「幸い頭の方は無事だった。もう心配ない」

親父がそう言うと、母と姉は「よかった……」と言って、その場で泣き崩れた。

「しばらくはまだ動けない。今はしっかり休むんだ。いいな、ゆっくり寝てろ」

口元に付けられていたのは人工呼吸器のようだった。俺はかなりの重体だったようだ。三

日間も眠り続けたということは、生死の境を彷徨ったのだろう。もしも俺が目を開けなければ、あの世に逝ったということみたいだ。

そして三日が過ぎた。少しずつ回復してきた俺は、集中治療室から一般病棟の個室に移された。運良く個室が空いていたらしい。親父が気を遣って、そこに入れてくれたそうだった。

俺の親父はこの病院で形成外科医をしている。つまり俺は医者の子息ということだ。親父は立派だが、息子が出来が悪い。それは否めないところだった。

俺の容態が安定するにつれて、家族みんなが俺の事故のことについて、いろいろと聞かせてくれた。

俺は中学の頃からバイクが好きで、高校卒業すると同時に早速バイクの免許を取ったのだ。しかし家族みんなはバイクに乗ることを反対していた。事故がいちばん怖いからだ。

俺はそんな家族の声を無視して、勝手に免許を取って、ローンでバイクを買ってしまったのだ。母も姉も仕方ないと諦めて、渋々バイクを許してくれた。

俺の名前は鴨志田^{かもしだ いっぺい}一平。定職にも就かずに、気ままにバイトをしながら日々を送っている。姉などは、そんな俺を見て「いつまでも遊んでいないで、早くまともな仕事を見つけなさい」と口うるさく言っていた。まあ母もだが。

父も同じ意見のようだが、それほど口うるさくは言われなかった。いくら言っても本人がその気にならなければ無理だろうと思っていたらしい。わりと自由にさせてくれたのだ。

俺はバイトがない日は、よくバイクを乗り回していた。特に海岸沿いの道路や、緑深い山合の道を走るのが、気持ちよくて好きだった。事故のときもそうだった。俺はよく走る山道を気持ちよく走っていたのだ。

ところが対向車がカーブを曲がりきれず、センターラインをオーバーして俺に突っ込んできたのだ。正面衝突した俺は、そのまま飛ばされた。ガードレールを越えて山の斜面を転げ落ち、その下の道路にたたきつけられたそうだった。

あの事故で俺が生きていたのが奇跡だと親父に聞かされた。それは俺の身体を見れば一目瞭然だった。

大きな怪我は左腕と右脚大腿部の骨折だった。包帯がぐるぐる巻きになっている。他にも擦り傷や切り傷が無数にあった。細かい傷は一、二週間で治るだろうが、骨折は一か月から二ヶ月はかかるそうだった。完治するまで俺は病院で暮らすことになる。